



※体育ローテーション前の「声だし」の風景

# シナプス

～園長室だより～



平成30年11月

## ことばの育ち

## 今回の内容

### ■気持ちをあらわすことば！

11月の某日、大阪府私立幼稚園連盟 南京阪支部主催の研修で、大阪樟蔭女子大学 辻 弘美先生を講師にお迎えし、幼児期における「気持ちをあらわすことば」の発達についてのお話を聞くことができました。言葉は様々な表現を可能にしてくれます。もちろんそれは目に見えるモノから目に見えない心的状態にまで及びますが、「気持ちをあらわす言葉（うれしい・かなしい等）」の発達が人とのコミュニケーションであったり、人との関わりを円滑にするひとつの要因でもありとされている研究知見があるそうです。

もちろん、まだまだ研究段階ではありますが、非常に興味深い内容でありました。言葉というと、モノの名前や会話など身近な生活に密着した語をまず連想しがちですが、そうした言葉のみならず、「気持ちをあらわす言葉」を使って会話することが「社会的な心（他者の心的状態について察することができる力）」を育てるというもので、その「社会的な心」こそが、円滑な人間関係を構築できるというのです。

約5,000名の乳幼児を対象に行った調査によると、3～4歳の時期に一番多くの語が習得され、3歳では喜怒哀楽に関わる基本感情の表現を主に習得、4歳からはそれらに加えて自分を評価した言葉、例えば「恥ずかしい」などといった心の動きをあらわす言葉が習得されるのが特徴です。5歳・6歳では、さらに感情だけでなく、思考の過程やその結果を捉える際に

必要な表現が言葉という道具を用いて可能になります。

いずれにしても、ここで重要なのは何気ない日常の会話です。子どもとの会話はもちろんのこと、家庭・夫婦間での会話、兄弟姉妹の会話などの中に「気持ちをあらわすことば」をいかに使うかが、その後の「社会的な心」の発達に大きな関係があると報告されています。もちろんこれも一研究であり、ひとつの考察ですが、これからのAI（人工知能）時代に必要な力、要素であることはいまでもありません。「他者の心的状態を察する」というと難しく聞こえますが、要するに『思いやり』の心を育むということであり、そういった他者を思いやる、心配する、感じる言葉を日頃から使い、投げかけることで、子どもたちはその言葉の意味を知り、感じ、自分の感情と共に、自分の言葉としていくのではないかなと感じました。

先日、園でもこんなエピソードがありました。目に砂が入ったようだったので、「目をパチパチ（開けたり閉じたり）してごらん」と声をかけるとおもむろに自分の掌で目をパチパチ叩きはじめてのです。決して言葉の捉え方として間違っていないのですが、なんとも日本語の難しさを感じたひとコマでしたが、同じ言葉でも、言い方やその時の雰囲気、その言葉の取り方、感じ方も人それぞれの所もあります。それも踏まえての「社会的な心」なのか難しいところもありますが、子育てのひとつの指標として意識して頂ければ幸いです。

### ■園長コラム

#### 気持ちをあらわす

#### ことば！

### ■保育日誌から

#### ～子どもたちの様子を先生の観点から～

先生たちが書いている「保育日誌」から、抜粋したものを掲載！子どもたちの日常の姿を先生目線でお伝えします。

### ■身長・体重

#### そして万歩計！

月に一度行う「身体測定」の数値と子どもたちの園内での運動量を把握するために定期的に計っている「万歩計」の数値をお伝えします。